

5月に空港での嚴重な検疫のニュースで始まった新型インフルエンザ騒動は、流行自体は収まったわけではないが、騒動としては収束して来ている。集団感染した学校への非難や、集団行事の中止、マスクの品切れ、予防接種への希望者の殺到等という現象の中にあつた過剰な反応を見れば、「騒動」と言っている。

この騒動を私は身近で見聞するとともに、主に中日新聞を読んで、世間の動きを注視していた。最も幸いだと思ったのは、感染者に対して強制的な隔離や治療がされなかったことである。

次に幸いだつたのは、対策として、日常的な健康管理が挙げられていたことである。感染を予防する手洗いやマスクよりも、感染しても影響を抑制できる抵抗力(広義での免疫力)が何より重要で、それを大きく保つ為には、不摂生を減らし、常に体調を良くしておくことである。それはインフルエンザ対策を越えて、生活の質を高めることにもなる。

5月に集団感染して誹謗中傷の電話があつたという、関西大倉高校で抗体検査をした結果、18.4%が不顕性感染だつたということが分かつた(中日新聞・12月12日)。感染しても病まないということである。抵抗力がある人にとっては、何の脅威でもなかつた。

予防として勧められた手洗いの習慣は、単に新型インフルエンザの予防になつただけでなく、他の感染症の予防にも効果があつたようだ。しかし消毒剤の頻繁な使用はからだにも自然環境にも良くない。ある程度の汚れがあるのが、私たちが生きる自然であつて、それを過剰に排除しようとする考えは、別の病を引き

起こすしっぺ返しを受けるだろう。

最も感心した記事は、「日本感染症学会によると、過去の新型インフルエンザは出現後一～二年以内に25～50%、数年以内にほぼすべての国民が感染している」(中日新聞・7月2日)という話である。先に感染するか、後に感染するかという問題に過ぎないということだ。確かに年末、近くの中学校や小学校の感染率(新型と思われるもの)は40%を越えていた。強毒性ではないから、感染が仕方ないものなら、完璧に感染を防ごうと過剰に反応する必要はない。個人的には都合の良い時に感染するのがいい。社会的には、混乱を起こさない為には少しずつ感染していくのがいいわけである。またワクチンや治療薬の開発・製造を期待すれば、感染拡大を遅らせることが必要になる。

インフルエンザに対する漢方薬は麻黄湯が中心になるわけだが、世間では、予防にも使えるとか、軽症でも麻黄湯でいいと誤解している人もいるようだ。病態が違えば、別の薬方を選ばなければいけない。耐性のないインフルエンザに、タミフルは予防的にも治療的にも使えるようだが、麻黄湯の効き方はまったく違う。予防的には使えないが、病態が合えば、ウイルスなど病原微生物の種類は関係ない。

身近での聞くところによると、昨冬にインフルエンザに、型を変えて、2度なつている子どもがいる。1度もならない子がいることを考えれば、そうした子には感染しやすい生活習慣・環境であるとか、抵抗力が弱い体質があるのではないかと思う。予防接種に躍起になる以前に日頃からそういう問題を改善していくことが大切である。(2009年12月冬至)

